

「彩都」2号の発行後に、読者の皆さんから寄せられたまちづくりへの提言などの投稿をご紹介します。

福岡は今、天神地区を中心に日々景観が大きく変わり期待されている。スポーツセンターがこわれ、ソラリア、イムズが建ち出したところからまちの様子は大きく変わり始めたようだ。そして西鉄福岡駅の再開発はみごとに統一されながら完成しようとしている。両方のビル群から押されて道路は狭く感じるが、福岡市民の一人としてまちをすーっと見て育ってきた私には何だか誇らしくさえあるのです。川端地区の再開発も楽しみで、キャナルシティが都市を彩りあるものにしたのならば、川端とつなぐことでどんなまちができるのだろう。天神、中洲、博多駅の、オフィス、アパートなどの商業地域には、きまじめな個性を出さない建物群の集まりを感じる。福岡市の西、福岡ドームの周辺の変わりようにも目をみはる。異次元の感さもあり、新しい近代都市の姿を、かいま見ているようである。この地区は今後さらに洗練されたまちなみを作り出してゆくだろう。こうやって見てくると、福岡という都市はどういう都市を目指しているのだろうかと思慮に思うことがある。都市景観をトータルに考えるならば、この地区は整然と並んだ無機質なビル群、この地区は遊び心を持った華やかなまちなみ、そしてある地区はもう少し高度に洗練された、しゃれたまちなみ、そしてそれらをまとめて、福岡とはこういうまちですとアピールできるような、いくつもの彩りがあり、いくつもの顔を持ったまちである。そして21世紀へ向けますます人が集まり発展し、なお、住みやすく便利で魅力あるまちづくりをしてほしい。古き良き物は壊さず存続されるべきであると思っていたが、いざ建ち変わると、それなりに期待を持てるものである。古き良き物を、どう生かし、福岡というまちに魅力ある彩りを作っていくか、楽しみである。

佐々木元枝(中央区今泉)

都市景観の中にうまく自然を採り入れたものを、作ってもあればと考えます。特に河川や海岸が都心部では、住民からは隔離された作りになっていると思います。子どもも大人も川と親しめるようなものにしてもらえたらと思います。釣

りや水遊びができる場所を川、海岸の一部に作ってもらえればと思います。また、特に都心部では緑が少ないような気がしますが、地価が高く土地の確保が難しいという問題もあると思います。例えばビルの屋上に木を植えるとか、工夫してもらった緑を増やしてもらえればと思います。屋上の緑化に協力してくれたビルには、補助金などを出せば良いと思います。コンクリートとガラスで固めたまちであれば、いくらデザインが良くてもホッとするところがないと思います。また街路樹も、もっと多く植えてもらえればと思います。歩道にタイムばかりを敷くよりも、余地があれば植込みを作ってもらえたらと思います。都心部のヒートアイランド現象の防止にもなるのではないのでしょうか。

中井仁(博多区中興服町)

都市景観賞受賞作品を見て「えっ」と驚いた。私たち日々生活している市民から見ても「おやっ」と感じている建物が受賞していたから。私は百道は大好きです。それは計画され、厳しいルールを守ったまちなみの美しさだけでなく、そのまちの背景に青い海と広い空があるから。その自然そのものの景観あつての百道だと感じています。そこにその建物は建ちました。「異彩」なのは認めます。そこに住む方々は満足されていると思います。私もこれがもっと別の場所に建つたものなら、個性的だと拍手を送ったと思います。でもここは百道、海や空や光の中の一部なのです。もし私が大男なら、この建物に大きなノコギリを当て、根元から切り取ったことでしょうか。人間が「この木は邪魔だ」と切り取るように。人間は何かを残したがりです。その理由のひとつは、自分の仕事や地位を形として人々にアピールするためなのかもしれません。実際今までそうやって、福岡や日本中に「住民不在」の建物がたくさん建てられてきました。受賞した作品が審査委員に認められたのはこの方向を正しいと感じ、続けていくつもりだからなのでしょう。市民が推薦しても受賞出来なかった作品というのにも気になります。せめて次点ということに挙げてはいただけないのでしょうか。また、この冊子の製作のレベルの高さも気になります。自らを褒めすぎる内容にこの装丁。これが私たち市民の税金が注がれたものかと思うと福岡市に対し情けなくあります。建物は洋服やモノと違い、建ててから何十年も、その場所で行方や時代を経て、人々と共存していくものだと思います。今一度、賞の在り方を問うべきではないのでしょうか。

荒俣麻子(中央区渡辺通)

荒俣さんへ

—都市景観賞審査委員から—

貴重なご意見をいただいたことに感謝します。良好な都市景観の形成で、最も大切なことは景観に対して高い関心を持つ住民の方々のアクティビティです。この意味で今回のご意見はシーサイドももち地区に対する深い思いをバックグラウンドとしたものとして承りました。

さて、意見の相違は、都市における海辺の景観形成をどのように考えるかということです。これまでややもすると、我が国の都市の海辺は明治以降の近代化の過程の中で、港湾施設や倉庫、工場などが集積するエリアとなり、景観的には殺伐としたものになりました。博多湾においても海から見ると、その大半が、現状でもこうした景観となっています。

我が国では、都市のこうした海辺の景観をどのように考えるかについて、近年、多くの議論があります。その中で、かつて我が国の多くの都市に見られたような自然の海辺と都市が共存していた景観をもう一度取り戻す景観形成の方向と、逆に、ダウンタウンのような都市の活動的なにぎわいのエリアと海辺とを一体とするような景観形成の方向が指摘されています。

今回のシーサイドももちの人工海浜域をどのような景観形成の地区とするかについて、いくつかの議論があったと思いますが、全体的には、後者の方向の都市のにぎわいと海辺が一体となった景観形成に重点が置かれています。その中で、ご指摘のネクサス百道レジデンシャルタワーは、その建築的なプロポーション、単純な形態と対比的な色彩構成、そして、頭頂部の意匠などにおいて優れたデザインがなされています。海から見た景観に、一つのエポックを与える質の高いデザインとして高く評価されます。

あなたがご指摘されています自然の海辺と都市との共存した景観形成の課題もきわめて大切なことと思います。そのためには、博多湾全体を展望して、それぞれの地区でどのような景観形成を行うか、そのコンセンサスを確立することが重要ではないかと思われまます。

(福岡市都市景観賞審査委員 竹下 輝利)

—「彩都」編集部から—

「彩都」は、景観づくりに関する議論の場になることを目指しています。ご指摘を謙虚に受け止め、一層の努力を重ねてまいります。